

# 随想 情操とは…

## 修行で悟りを開いたり、自然に感動を覚えるのは人間固有のものか

(株)PPOC研究所 加藤 宏光

先々週の日曜日であったか、NHK・BS放送のドキュメント番組で山伏(注1)の実態を知るため、五日間の修業を体験するドイツ人の男性大学院生と女性歌手のドキュメント番組があった。残念ながら番組のタイトル・日時は明確でない。

場所は吉野熊野地域に位置する大峰山で、二〇年にわたって修行を続ける修験者(名前は失念)の指導の下に、座禅を組むことから始まって水垢離、さらには山頂への参拝登山をこの二人のドイツ人が体験する。僅か五日間の修行体験であるが、指導僧(?)のカリキュラムに従って、日々異なった修行するのである。

筆者には残念ながらこのような

経験がない。もちろん、日本人の矜持はあるから、これらの伝統に關しての興味は深いものの、根っからのスポラと日々の多忙にかこつけて、興味を満足させるのは書物からの経験談によるばかりである。そうした自分の過去を踏まえて、ドイツ人であるこの二人が、日本の歴史的文化に興味を持ち、あえてそれを体験することによりその境地に触れたいと考えたと、さらには実体験をすべく外国の地へ出向いて来ていることに多少の衝撃を受けた(同時に何もトライできていない自分に少なからずガツカリもした)。

座禅の本質は《無我の境地に至ること》とは聞いたことがある。しかし、無我の境地に至るとはど

も(共鳴が起き得ること。予感とはそうした共鳴であろうこと、を自分なりの答えとしてこの疑問にけりつけた、という話である。先の学生が得た体験は筆者の考えに繋がるような気がする。それを、ドイツ人の学生が僅か五分ほどの滝行で体得したなら《修行のもつパワー》はそれなりのモノであろう。

に耐え切った。そして曰く、「冷水を浴びているうちに冷たさが限度を超えて、それを感じなくなった。さらに、滝水や滝の崖、山そのものと自分が一体化するような気持ちになつてきた」とのこと。僅か、二日の体験から到達したこの学生の話には改めて驚いた。

確か、この随想でいつか述べたことがある、文系の義弟が投げた疑問に、理系発想の限界の逸話と繋がるものがある。

振り返れば、《寝転がっている自分と書棚の境界はどこだ》という文系の義弟が投げた疑問に理系発想の限界を感じ、しばらく深刻に考え込んだ、という話である。

その時得た自分なりの答えが《自分と書棚には境界がない》というものであった。自分は地球の一部、それを包含する宇宙の一部であり、また書棚も(無機物ではあっても)地球の一部、ひいては宇宙の一部である。それが故に(いまだ科学では証明できなくと

んなことか、はイメージもできない。まったくの素人であるドイツ人が座禅を組むに当たって、指導僧は「二つの事柄に思いを集めなさい」と言った。なるほど、考えないというのは難しい。しかし、《二つのことに考えを集める》なら、筆者にもできそうな気がする。

筆者も夜眠るときにはその時々思い付くこと、たとえば幼かった時の出来事やうれしかったこと、残念だったことのそれぞれ《二つのことに考えを集める》ようにしている。そうすることで、いつの間にか眠りに落ちていくのである。これは、禅の境地を求めるといふような高尚なモノとは次元が異なるとはいえず、考えをまとめる

化に触れ、日本を知ろうとしていくことには改めて感銘を受けた。続く番組で《穂高を愛した男宮田八郎》という写真家(故人)の写真を紹介するドキュメンタリー番組を見た。内容はともかく、穂高の日常を写真として紹介するこの番組にあった写真はそれぞれ美しい。朝日、夕日、霧の流れと峰々や雪山、秋のモミジ等々、心に響くものであった。

前月号であったか《感情や意思をもつタコ》についてのインタビュー記事を紹介した。その折に感情・意思を持つのはヒトだけ、と思ひ込むのは人間の思い上がりかもしれない…と書いた。先に紹介した、修験修行の姿とそれを受け止めるヒト、さらには自然そのものが季節折々の刹那にヒトに与える、美しいと感じる感動。

その美しさを感じるヒトと感じない(であろう)動物の間には、越えられない差があるのも事実である、と実感した(注2)。

ことは散漫になりがちな《考える》という行為を単純化するのには役に立つ。

次の日は《水業》である。滝に打たれながら、五分間ほど(正確には覚えていない)先と同じように《二つのことに考えを集める》のだそう。水温は一〇度C。これはかなり冷たい。

高校生の頃、毎年出かけた三重の山奥にある川で泳いだことがある。この水温が二〇度Cで、切れるように冷たく感じたものであった。それが二〇度Cでしかも滝に打たれているのであるから、五分であつてもかなり厳しい。そう思っていると、二人のドイツ人のうち女性歌手は、二―三分でドロップアウト。男性学生はそれ

注1

山伏…山中で修業をする行者のこと(修験者とも)。日本では各地に山・巨石・巨木等を崇拜対象とした山岳信仰は、原始時代のものである。また、伝来した仏教でも山に入つて修行する僧侶がある。ここから比叡山延暦寺、高野山金剛峯寺といった山岳寺院が建築され、さらに奥山入つて修行する僧侶がいた。厳しい修行により山伏は常人にはない力を持つとされた。鎌倉時代以降組織化が進み、山伏を統括する寺院のうち有力となったのは天台宗系本山派と真言宗系当山派。山伏は、頭に頭巾、兜巾と呼ばれる多角形の小さな帽子を付け、手に鋤杖(金属製の杖)を持つ。袈裟と、篠懸(すずかけ)という法衣をまとう。また、山中での連絡・合図のためのほら貝等を持つ。

注2

動物は審美眼があるのだろうか? 実のところわからない。確かにうれしさや悲しさ、寂しさのような抽象的な感性はあると思われる(母性等)。しかし《美しさに感動する》《抽象画にひかれる》というような感情・感性はないもの、と著者には思える。もし、それさえ動物にあるなら…ちょっと怖い!